

平成 28 年度 推薦入試試験問題（生活科学科 生活科学専攻）解答例

問（100 点）

【採点のポイント】

- ・ 居間の形態と役割を理解していること
- ・ 現在の生活における問題点が具体的に述べられていること
- ・ 解答全体の論理に一貫性があること
- ・ 基本的な文章表現ができていること

【解答例】

現在の日本の住宅では当たり前になっているDKという形態が普及したのは1960年頃からである。それ以前、農家では、囲炉裏が暖房や照明の役割をしていたため、家族みんながそこに集まり、仕事や休息などあらゆる作業の場となっていた。囲炉裏の間が食堂であり、仕事部屋であり、子供部屋であり、寝室であった。都市では囲炉裏はなかったものの、ひとつの部屋で食事をし、団らんし、寝るのが普通であった。水を使う台所は別にあり、台所で行う作業以外は全て居間で行われた。食卓を出して食事をし、来客があれば片付け、夜は布団を敷いて寝た。これは、住宅が狭かったことと、畳の部屋に座って生活し、布団を敷いて寝るという日本の生活スタイルによるものであった。

それに対して、DKの登場以後、食事する場所と睡眠をとる場所を意図的に分離するという考えにより、台所と食堂が一部屋となり、居間がリビングとなって団らんの場になった。料理を作って食べる部屋と寝る部屋を分けることは衛生的であり、家族のプライバシーを守り、ゆっくり休息できるという利点がある。また、調理と配膳が同じ場所のできることは、家事労働の軽減にもなった。さらに、核家族化が進行するとともに、経済成長により暮らしが豊かになって住宅の面積が広くなり、両親の寝室と子供部屋が別になり、生活の中心が家族ひとり

ひとりの個室へと変化した。

このような変化は、現在の家族関係における様々な問題の背景となったと考えられる。個人のプライバシーが重視されるようになり、ひとりで部屋で過ごす時間が増えるとともに、家族のきずなの希薄化につながった。家族みんながひとつの部屋で様々なことをして過ごすというのは、家族のコミュニケーションを円滑にして、より密接な家族関係の基になっていたのである。(770字)